

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2019 年 秋号

第 10 巻第 3 号 (通算 28 号)

2019 年 11 月 30 日発行

2019 年度 全 国 大 会 特 集

2019 年度全国大会を終えて 2020 年度全
国大会に向けて

丹羽 卓 (金城学院大学)

今秋は週末ごとに日本列島を襲ういくつもの台風に悩まされました。そんな中で、全国大会が無事開催でき、企画委員長・実行委員長としては胸をなでおろしました。

今年の大会も充実した内容で、運営も順調で、良い会を持てたと思っています。ご協力いただいた皆さん、ご出席いただいた皆さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。大会の具体的内容はこの後の報告に譲ることにして、ここでは大会全体を見て気付いた点を取りあげたいと思います。

まず、今大会の最大の特徴は、会員以外の多数の参加者があったことだと思います。大会出席者の総数は76名で、その内訳は会員36名、招聘者+関係者11名、それ以外の外部からの参加者29名でした。外部参加者を多数集めるのに貢献したのは、ダニー・ラ

フェリエール氏が特別ゲストであったことと、「講演」以降のプログラムを一般公開とし、そのことを開催校である立教大学のホームページで告知したことでしょう。

ラフェリエール氏の参加は画期的なことでした。立花会員や小倉会員による邦訳が何冊も出版され、ケベック/カナダに関心を持つ人々を越えて知名度が広がっている作家の参加は、ケベック学会の外に大きくアピールしたに違いありません。そして、ラフェリエール氏の姿を目の当たりにし、その肉声を聞かれた方々は、きっとそこに立ち会えたことの幸いを思われたことでしょう。その一方で、アカデミシャンを招くというのは想像以上に大変で、立花会長が大変なご苦勞をされました。そのご勞をねぎらうとともに、このような企画の継続の難しさを思います。

今回の大会は立教大学異文化コミュニケーション学部との共催で、一部を公開しました。これまでの大会も他の学術団体と共

●本号の内容●

巻頭言 (丹羽卓) …1 全国大会セッション報告…3

シャロン名誉会員の叙勲 (矢頭典枝) …11



大会参加者の集合写真

催したことはありましたが、一部を公開したこともあります。今回のように大学のホームページに掲載されたことはないと思います。主としてそれを見るのは立教関係者だとしても、それが効果的だったのは間違いないでしょう。学会は、その領域の専門家に閉ざされたものでなく、隣接領域の専門家のみならず、一般の方々にも開かれたものとなるべきだと考えますので、今後今回の立教大学のケースを参考にして、大会に関する積極的な広報活動のあり方を検討する価値がありそうです。

他方、全会員の3分の1の参加しかなかったことは一度考えてみなければなりません。他の学会も似たような状況なのかもしれませんが、状況改善に取り組む努力は必要です。自由論題の報告者についても、ただ公募するだけでなく、戦略的に声をかけてもよいだろうと思います。これまでも人々の興味を引くような内容のプログラムとなるよう工夫をしてきましたが、まだ努力する余地はありそうです。まもなく次の大会の計画に着手します。興味深いシンポジウムなどを企画できそうな方があれば、ぜひ積極的にお知らせいただきたいと思います。

まったく新しい企画のアイデアも歓迎します。

(日本ケベック学会副会長・企画委員長)

<各セッション報告>

2019 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表のダヴィッド・ブルロット氏からご挨拶をいただいたのち、自由論題セッション、講演、対談、シンポジウムの順に行われ、活発な議論が繰り広げられました。対談の前には、開催校を代表して浜崎桂子・立教大学異文化コミュニケーション学部長からご挨拶をいただきました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

自由論題セッション

司会：廣松 勲（法政大学）

自由論題の第一報告は、岩崎真紀会員による「移民と宗教：モントリオールのエジプト系キリスト教徒共同体の発展にみるコプト正教会が果たす役割」と題する報告であった。「東方諸教会」に分類されるコプト正教会を事例として、移民の社会統合において宗教が果たす役割の一つとして、その「社会的機能」について分析がなされた。



岩崎真紀会員

これまでに発表者は複数のフィールドワーク（パリ、モントリオール、リバプール、日本）を実施しているが、今回は特にケベック州モントリオールにおける「聖ジョージ聖ヨセフ・コプト教会」に注目し、その個別具体的な社会活動について検討がなされた。その結果として導き出された「集団内的機能」と「集団間的機能」のそれぞれから明確となったのは、一見すると分離要因とも見なされかねない「宗教」を媒介として、コプト移民たちがホスト社会へと参入する有様である。ケベック社会における移民統合や間文化主義の研究については、私見では政策研究が大きな部分を占めていると考えられるが、本報告はこれまでとは異なる新鮮な視点であったといえる。質疑応答では、教会の位置するピエールフォンの社会的位置付け、他のアラビア語話者やカトリック教会との関係、また使用した統計情報に関する質問などがなされた。このような点にも配慮しつつ、さらなる研究の発展が期待できる内容であった。

次に第二報告は、立花英裕会長、真田桂子副会長、佐々木菜緒会員による「ケベッ

ク詩の世界：『ケベック詩選集』の刊行に寄せて」と題する報告がなされた。通例の自由論題での報告とは異なり、『ケベック詩選集：北アメリカのフランス語詩』（彩流社、2019 年）の編集及び翻訳に携わった 3 名がそれぞれ自らの担当箇所や翻訳技法について説明がなされた。なお、残念ながらもう一人の翻訳者である後藤美和子氏は参加されなかった。本書はローマン・マイヨ、ピエール・ヌヴェー編『La poésie québécoise : des origines à nos jours』（Éditions Typo, 2007）を底本としながら、原著掲載の 114 名の詩人から厳選すると同時に、新たにヌヴェー氏の助言で追加された詩人を含めて、合計 36 名の詩人のアンソロジーとなっている。翻訳者それぞれからの報告では、ケベック詩の翻訳のみならず、ひいては「詩」という文学ジャンルの翻訳における魅力や困難が語られた。割当時間の関係で質疑応答には多くの時間を割くことができなかったが、今後本書の読解を介して、フランス語表現ケベック文学を構成する広大な詩的領域について、日本におけるさらなる研究の進展が期待できる内容であった。



（左から）立花英裕会員、佐々木菜緒会員、真田桂子会員

最後に第三報告は、韓国ケベック学会 (ACEQ) から派遣されたシン・ジュンガ (Shin Junga) 氏による「887 de Robert Lepage : un travail « engagé » sur la mémoire」と題する発表であった。2016 年に世界規模で上演されたロベール・ルパージュの演劇作品『887』を題材として、本作における「記憶」の役割について詳細な分析がなされた。ケベックにおいて「記憶」といえば、州の標語である「Je me souviens」が思い出されるが、そのような記憶の文学としてのケベック文学において、本作はとりわけ「公的歴史」と「集合的記憶」との関わりを「個人的記憶」を一つの足掛かりとして演劇化したものである。ルパージュ自身が幼年期を過ごした「ケベック市のマレー大通り 887 番地」を起点として、物語では 60 年代から 70 年代のケベック州の歴史において「集合的記憶の空隙」と呼ばれる複数の出来事が語られていく。このような歴史語りの演劇化において、とりわけ大きな役割を演ずるのがミシェル・ラロンドの詩「Speak White」である。この時代を象徴する「社会的言説」の一つとして、また物語の「導きの糸」としてラロンドの詩が機能している様について、本報告では幾つもの事例に基づきつつ丁寧に分析が行われた。質疑応答ではルパージュの他の作品 (『アンデルセン・プロジェクト』など) との差異についても説明がなされ、本作『887』はこれまで以上に記憶の演劇としての性格が強いとの説明がなされた。日本でも 2016 年に上演された作品である



シン・ジュンガ氏

が、本報告はその魅力と物語の仕掛けについて余すところなく明らかにしてくれた内容であった。改めて日本において、本作品が上演される機会が訪れることを願うばかりである。

講演

司会・通訳：羽生 敦子 (立教大学)

本大会の講演は、ケベック大学モンREAL校都市観光学部教授で 2019 年度立教大学招聘研究員として来日したマルタン・ドゥルアン (Martin Drouin) 氏による「ケベックの遺産と観光：長い歴史のためのいくつかの指標」であった。

「ケベック、1534 年から感動を提供するところ」これは、Bonjour Québec (今日の Québec Original) による観光促進キャンペーンのコピーであるが、このキャッチコピーに着想を得た「遺産と観光」に関するケベックの観光分析についての報告であった。

Bonjour Québec のキャンペーンでは、ケベック州の広さ、平原、森、山、大河、湖、川などの自然の多様性、また 1534 年にジャッ



マルタン・ドゥルアン氏（左）と司会の羽生敦子
会員

ク・カルティエがサン・ローラン河を遡上して出会った先住民たちとの異文化交流にはじまり、以後、フランス、イギリスの文化との歴史的交流、現在では北米のコスモポリタンな状況から文化の多様性が満ちた場所と謳っている。

ドゥルアン氏は、「遺産」は、近代期（16世紀から17世紀）にヨーロッパで現れた概念・定義であり、北米のように歴史の浅い国とは定義が異なることを前提とし、ケベック観光と自然・文化遺産の関係について、「ツーリズム」という英単語ができた19世紀を中心に講演を行った。ケベックの「有形遺産」・「無形遺産」・「自然遺産」について紹介があり、「自然遺産」について、自然を発見したのは、19世紀のロマン主義潮流の中の旅行者たちであり、とりわけ壮大な自然のパノラマは絵画などを通して人々を魅了したと言及した。産業の発達、交通手段（鉄道、自動車）は観光客により多様な自然を提供することになり自然遺産は現在でも観光の中心である。さらに近年ケベックが自然遺産として強調するのはサン・ロー

ラン河であること、カルチエの旅から、航空機の登場までは、この河が交流の発着地であったという歴史的事実を踏まえ「国の歴史的価値のある場所」として認定された経緯についての説明があった。

「有形遺産」に関しては、元来ヨーロッパからの歴史を想起させるケベック・シティの旧市街、カトリック教会などをはじめとする建築物、今日ではその歴史を説明する道路のプレートや歴史的に重要な人々の銅像などを示した。最近の傾向としては、対象物を見るだけではなくインタラクティブに楽しめる博物館（インタープリターセンター）が人気である。また昔ながらの素材を使ったテロワールの食べ物なども遺産とされる。「無形遺産」として、ケベックの「フランス的事実」を示す「フランス語」であること、これは観光客にとって「北米でフランスの生活を見る」というある種のエキゾティズムを提供している。しかしながら、1960年代以降は、「フランス的事実」を見せることではなく「ケベコワ」として生きる姿を見せることに変容していること、つまり、フランス系に留まることなく、先住民族の文化を観光の文脈で保存することや、スコットランド、アイルランド、ユダヤ、イタリア、ポーランド、ポルトガル、ウクライナなどのヨーロッパ系、アジア、アフリカ、中央アメリカなど移民文化と共存する、あるいは共に構築する文化を見せることに変容していると指摘した。

ドゥルアン氏は、「1534年から感動を提供

するところ」というフレーズを、幻想的な表現ながらも多文化が出会う場所としてのケベックを強調している点において、観光プロモーションのコピーとして評価している。

観光はユネスコの世界遺産の事例を見てもわかるように、遺産の評価と直接的に関係をもち発展したものであり、また一方で、遺産の保存は観光業の発展によって促進している。この観光と遺産の関係について、「歴史の浅い北米都市ケベック」を事例に分析を行ったものであった。

会場からは、観光客の国別の状況、ケベック州での交通手段などについての質問があり、地理的条件を考えれば当然であるが、ドゥルアン氏よりアメリカ合衆国からの来訪者が一番多いことや、自動車での移動が一般的であること、自然観光が最大の目的であることの説明があった。また、ヘリテージ観光に関して、ケベックがケベコワとして自立する以前の歴史遺産をどのように観光資源として利用するのかというような主旨の質問があった。具体的には、英国の支配下の時代の遺産、つまりフランス系にとっての「暗黒の時代」における歴史遺産の利用についての問いであったが、この質問を、ドゥルアン氏に理解してもらうのに手こずってしまった。ケベコワにとって、1960 年代の「静かな革命」以前もかれらの歴史であって、「暗い時代だ」とみなしてしまうのは、第三者的な見方にすぎない。司会者である私も「ダークツーリズム的な利

用があるのでは？」と口にしてしまったが、英領下の歴史をダークと括るのは他者の奢りであろう。ケベコワはどんな歴史も、ヘリテージ（遺産）として観光資源として活用しながら保存しようとしているのである。

今回の講演によって、日本をはじめとしたアジア諸国やヨーロッパ諸国では遺産を観光資源と考えるのは当然と考える中、北米では比較的新しい試みであることを知り、新鮮な驚きを感じた。

対談「書くこと 旅すること」(ダニー・ラフェリエール×立花英裕)

司会・通訳：小倉 和子 (立教大学)

午後のプログラムは、今回が 2 度目の来日となる作家ダニー・ラフェリエール氏 (アカデミー・フランセーズ) と立花英裕会長との対談で始まった。

本題に入る前に、ラフェリエール氏がアカデミーで先ごろ就任した *chancelier* (辞書によれば「副会長」という役職についてご本人に説明していただいた。毎週木曜の午後開催される全体会議において、議長の隣に座り、挙手している人に発言を許可する役割だそうだ。仕事自体は単純なものだが、ハイチの独裁政権下で、自由に意見を言うことを禁じられて育った者にとっては重要な意味をもっているとのことだった。

その後、そもそもアカデミー・フランセーズがどのような機関なのかについても教えていただいた。フランス語にたしかな規則を与え、それを豊かな言葉にすることを



(左から) 司会の小倉和子会員、立花英裕会員、ダニー・ラフェリエール氏

目的として、1635 年、ルイ 13 世治下で宰相をつとめたリシュリュー枢機卿によって設立された機関である。40 名の会員は終身で、ラシーヌ、コルネイユ、ユゴー等の名立たる作家たちだけでなく、パストゥールのような科学者も名を連ねてきた。なお、アカデミー・フランセーズについては、僭越ながら筆者も紹介させていただいたことがあるので、参照されたい(「ダニー・ラフェリエールのアカデミー・フランセーズ入り」『ケベック研究』特別号、2014 年 11 月、149-157 頁)。

このような前置きのあと、いよいよ本題に入った。まず司会と通訳をつとめた小倉のほうから、「書くこと 旅すること」というタイトルについて説明させていただいた。これは、大会直前に刊行されたラフェリエール氏の対談集の拙訳『書くこと 生きること』(藤原書店)をもじったものである。この対談集を読むと、彼にとって、書くことと生きることは同義であることが分かるが、

書くことと旅することも同様ではないかとの仮定のもとにつけられたタイトルだった。というのも、1953 年にハイチの首都ポルトープランスで生まれたこの作家は、幼少期をプチ=ゴアーヴの祖母の許で過ごし、青年期以降もモンレアル、マイアミ、パリ…と移住を繰り返し、作家として講演や文学フェアのために移動することも多いからである。彼はいわば、書きながら移動し、移動しながら書いている。

対談相手の立花会長のほうからは、ラフェリエール氏にとって重要な場所は 3 つあり(ハイチ、ケベック、フランス)、自身が大いなる旅人であるだけでなく、小説の中でも多くの旅が語られるが、旅は彼にとって具体的にどのような意味をもっているのか、との質問がなされた。それにたいしてラフェリエール氏からは、彼にとっての旅は何よりもまず「月日は百代の過客にして…」という芭蕉の旅であり、自分の人生を形成してきたものそのものである、との返



ダニー・ラフェリエール氏と参加者

答があった。モンREALでの 8 年間に及ぶ下積み生活のあと、処女作『ニグロと疲れないでセックスする方法』を出版すると、発表直後に有名人になっていて、それ以来、北米の資本主義社会にありながら、旅行をするために自分でお金を払ったことがないこと、自分の作品はさまざまな言語に翻訳されることによって、自分が旅する前から本が旅していること、それは文学の力、アルファベット 26 文字の力によるものであることなどが指摘された。

次の質問は空間的な距離と時間的な距離、という 2 つの距離についてだった。ラフェリエール氏の人生において「亡命」が重い意味をもってきたことは明らかである。しかし、自分は空間的な「亡命」を余儀なくされたが、人間は誰もが時間の「亡命者」なのではないか、と彼はいう。子ども時代に遡ることは誰にもできないからだ。ところが彼自身は『コーヒーの香り』や『限りなき午後の魅惑』などの作品のおかげで子ども時代に戻ることができた。これこそが作家の特権である。

最後に、彼の最新作について画像とともに紹介していただいた。伝統を重んじるア

カデミー・フランセーズでは、今なお手書きが主流である。その会員になって以来、彼自身も「手」という器官が力を取り戻しているそうだ。タイプライターで書き始めたこの作家は今や、文字も挿絵もすべて手書きという本を 2 冊(『猫のいるパリの自画像』、『対岸へ』)上梓して、時代の流れに抵抗している。パリの街を彼の分身ともいえる猫と一緒に散歩しながら書き留めたスケッチを含むユニークな作品には、マルロー、セザール、ブルトン、バスキアほか多くの作家や画家たちが、文章ではなく絵によって「引用」されている。機械やインターネットの普及により加速化した人間社会において、手書きの時間の流れを取り戻すことの重要性が説かれた。

対談後、会場からは、処女作を発表するまでの 8 年間に及ぶモンREALでの下積み生活の間どのようなことを感じたかとの質問があった。第三世界の知識人だった彼が工場労働者や清掃人を経験し、植民地主義や自由、フェミニズム(そして冬の寒さ)など、ハイチではまったく知らなかったことを学んだ貴重な時間だった、との返答があった。

シンポジウム「旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの」

司会：関 未玲（愛知大学）

「旅」を今年度の主要テーマとした本大会を飾るシンポジウムでは、3 名のパネリストに観光的・文学的・地理学的・歴史学的な見地からご発表いただき、ケベック研究の新たな視野を開拓する試みがなされた。羽生敦子会員（立教大学観光研究所）からは「航海者シャンプランを育んだ土地とケベックへの夢」と題した発表のもと、1608 年にケベックに要塞基地を建設し、フランスが北米に進出する礎を築いた航海者サミュエル・ド・シャンプランについて、観光的な視野も入れながらお話しいただいた。シャンプランは 1567 年（1570 年とする資料もあり）8 月 13 日にフランスのブルージュで生まれたが、ブルージュはラ・ロッシュェルから 30 キロメートルほど南に位置し 16 世紀に都市整備が行われた港湾都市であった。現在では海が後退し陸地になってしまったために港としての役割が果たせず、陸の孤島と表現されるほどにまで衰退してしまったが、シャンプランの存命中はフランスで最大の港のひとつであった。タラ漁や塩産業でも繁栄し、バスク、ポルトガル、オランダ、北欧等の外国船が日々往来していたこの都市は、20 の言葉が話されるバベルのような多言語都市であったと言われる。その繁栄の時代にブルージュで生まれたシャンプランが、宗教戦争によって血で血を洗う悲劇の舞台へと街が無残

にも変わってゆく姿を見て心を痛め、さらにはスペイン領アメリカでの過酷な黒人奴隷の労働条件を目の当たりにし、フランスの北米進出に彼なりの理想郷を見出そうと努めたことは想像に難くない。新天地での心洗われる雄大な自然に見せられたシャンプランは、理想郷のような都市の建設をケベック要塞に託し、また少なくとも彼自身は新大陸とフランスをつなぐ公平な交易を築こうとしていたと考えられる。ケベックの大地がいかにシャンプランの心を捉えたのか、その魅力についてシャンプランの足取りを辿るように、羽生会員から図や資料を交えて説明がなされた。そして最後にシャンプランの足跡をフランスのラ・ロッシュェルの地に見出し、フランスとケベックをつなぐ発表をしていただいた。

特別ゲストの石橋正孝氏（立教大学）からは「ジュール・ヴェルヌとナイアガラ瀑布」というタイトルで、地理学的小説を描き続けた作家ジュール・ヴェルヌとナイアガラの滝との特異なかかわりについて、ヴェルヌの興味深い創作方法なども紹介いただきながらお話しいただいた。『八十日間世界一周』『海底二万里』『地底旅行』等で知られる 19 世紀フランスの作家ジュール・ヴェルヌ（1828～1905）は、世界中を舞台とする地理学的小説連作＜驚異の旅＞の執筆に半生を捧げ、その構成作品の多くで自ら足を運んだことのない土地を描いている。地理学雑誌を中心に、同時代の多くの資料から書き抜いた情報をパッチワークする手



(左から) 管啓次郎氏、石橋正孝氏、羽生敦子会員

法が取られており、それらのメモは作品に使用されるたびに、該当箇所に抹消線が引かれ、未使用箇所がなくなると破棄されていたという。同様に、ある作品で取り上げられた土地は、手元の地球儀に印が書き入れられ、原則としてその後二度と作品に登場することはなかった。しかしナイアガラの滝だけは、このようなヴェルヌのスタイルのなかで二重に例外的な存在となっている。第一にヴェルヌは実際にナイアガラの滝を訪れたことがあり、第二に 5 作もの作品の中で登場人物たちに瀑布を訪れさせている。すで 1792 年にシャトーブリアンがナイアガラの滝を訪れ、旅行記を発表していたが、実際にこの瀑布を前にしてヴェルヌはヨーロッパにはない「自然の驚異」と対面し、人工物の無力さを痛感する。すさまじい爆音とともに大量の水を吐き出すナイアガラの迫力について、いかなる芸術家といえども表現不可能だと語り、シャトーブリアンの描写でさえナイアガラを捉えることができていないとヴェルヌは暗に指摘する。ナイアガラのエネルギーを文学的に汲

み尽くすために、彼自身 5 回にわたって作品で描き続けるほかなかった。ヴェルヌ作品を文学的に再評価した最初の批評家の一人でもあったビュトールは、『毎秒 681 万リットルの水』と題した小説を自らも上梓し、変幻するナイアガラを紹介した。旧大陸にはない規模のスケールを持つ自然の驚異が作家たちを魅了し、フランス文学の系譜のなかでその姿を映し出すエクリチュールへと置き換えられていく様を石橋氏と辿ることができた。

最後のゲスト登壇者は詩人としてもご活躍されている管啓次郎氏（明治大学）に、「旅を書くことを学ぶ」というタイトルで発表いただいた。旅を詩へと再創造する管氏の詩作方法は、日常から異空間へと身を置き換える旅そのもののプロセスでもある。現実とその似姿として記述された旅とのあいだにある乖離を調節しながら、旅行記を執筆する自身の経験について触れ、「旅を書く」ことが旅そのものとなる瞬間についてお話しいただいた。旅が出現させる非日常の時空は、日常を遮断させるだけでなく、

この日常に身を置く私たちの自己輪郭をも揺さぶる。1984 年から翌年にかけて管氏が巡ったブラジルからカリブ海にいたる旅は、滞在記『コロンブスの犬』(1989)として活字化されており、この滞在の間ずっと手元に置いていたのがジル・ラプージュの本 *Equinoxiales* (1977、邦題『赤道地帯』) だったという。『赤道地帯』はノンフィクションとして初めてゴンクール賞の候補作品となった、旅行記ともあるいは小説ともとれる不思議な書物である。管氏はこのブラジル旅行記が、現実と幻想のあいだをつねに問い直しつつ進まなくてはならない<旅の記述>の性格をよく意識した作品であると指摘する。そして自らも、ブラジル旅行を続けるなかで同時並行的にラプージュを訳しつつ、『コロンブスの犬』というブラジル旅行記を執筆する。旅は無限の異空間を提供するように思われるが、管氏は旅を書くことは旅の限界をあらわにすることだという。そしてこの限界を通して、自己の輪郭が確定されるとも指摘する。旅と書くことが同じ時間のなかで共有されたときにはじめて、記述への接近が可能となるのかもしれない、という氏の言葉は説得力に富み、しばし旅行記を読み終えた読後感に似た感覚が私たちにも残る。最後に管氏自ら、詩の朗読を披露していただいた。

旅行者は旅をその都度ごとに 1 回性のものとして体験するが、この体験が記述され、書き換えられていくことで、旅は時空を超えた交信の場を生み出す。旅が新天地開拓

の探検であった 17 世紀、ジュール・ヴェルヌが SF/旅行文学を花開かせた 19 世紀、そして世界の横断という極めて現代的な旅の在り方をおして、俯瞰的な視野で「旅」をめぐる議論が続き、会場からも時間が延長するほど次々と質問が続いた。時間を駆け巡るシンポジウムは熱気のなか閉じられた。

<寄稿>

シャロン名誉会員の叙勲

矢頭 典枝 (神田外語大学)

令和元年春の外国人叙勲受章者として、AJEQ のクロードイヴ・シャロン名誉会員が旭日中綬章を受章された。日本・カナダ間の学術交流及び相互理解の促進に寄与した功績が認められ、叙勲の運びとなった。

シャロン名誉会員は、1978 年よりケベック大学モントリオール校 (Université du Québec à Montréal (UQAM)) で教鞭を執られ、2001 年に UQAM 副学長に就任、2011 年から 2013 年までケベック州政府在日事



UQAM で開催されたシャロン名誉会員の叙勲を祝う会 (2019 年 10 月 3 日)

(左から) Magda Fusaro UQAM 学長、シャロン名誉会員、伊澤修在モントリオール日本総領事
(写真提供: 平井みさ氏)

務所の代表を務められた。その後、UQAM に戻り、2018 年にご退職、現在は UQAM 名誉教授として、引き続き UQAM の大学院生の修士論文と博士論文の指導にあたり、日本とカナダの学術交流に尽力している。

ケベック州政府在日事務所の代表在任中は、シャロン名誉会員の発案でケベック州政府在日事務所設立 40 周年記念事業として『遠くて近いケベック：日ケ 40 年の対話とその未来』を出版した。本書は、シャロン名誉会員の序文に続き、AJEQ の会員たちが自分の専門分野を中心に分担執筆した論考で構成された。

シャロン名誉会員の日加学術交流と相互理解の功績は、ご夫人の平井みさ氏の内助の功に支えられたことを忘れてはならない。平井氏は、UQAM の École de langues の日本語プログラムの主任教員として長年活躍した。在職中は、ご主人とともに、私の勤務先である神田外語大学を含む数多くの日本の大学との国際提携を結び、UQAM との交換留学および推薦留学を促進した。

UQAM と神田外語大学との関係は、2016 年の KAKEHASHI プロジェクトに始まった。これは、当時、日本政府（外務省）が推進した「対日理解促進交流プログラム」で、日本と北アメリカを中心とする各国・地域との間で、大学生と高校生を対象に文化交流をさせるプロジェクトであった。日本に招待された外国人学生が、日本の社会、文化、歴史、政治、外交に関する理解を促進し、国際社会における対日イメージの向上と日本へ

の関心の広がりを推進することを目的とした。カナダからは UQAM が選ばれ、日本からはシャロンご夫妻の推薦により神田外語大学がパートナーとなった。派遣された UQAM の 21 名の学生たちは、日本滞在中、神田外語大学において日本文化についての講義を受け、日本人学生たちと楽しく交流し、NHK 放送センターや JAXA（宇宙航空研究開発機構）などを訪問した。神田外語大学からは 6 名がモントリオールに派遣され、UQAM の学生たちとの交流の他、モントリオール市内視察、在モントリオール日本国総領事館を訪問、ケベック市にも足を向け、ケベック州議会議事堂で同州議会議長を表敬訪問するなど、貴重な体験をした。

シャロン名誉会員は日加交流だけでなく、カナダの外交官として 1980 年代後半の在中国カナダ大使館時代に加中関係に貢献し、その後 1999 年から 2011 年までユネスコ憲章国際ネットワークの国際情報通信に関するネットワーク（ORBICOM）の事務局長を務めるなどハイプロファイルの人物であるが、大変控えめで飾らず、いつも人のために尽くすことを考えている。このためシャロン名誉会員を慕う人は多い。こうした人望と日本に対する深い造詣も今回の叙勲の根底にあると思う。AJEQ 会員として心からシャロン名誉会員の叙勲を祝いたい。

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎